

# LEADERS NOW!

## みんなで福祉の世界を引っ張っていこう

### 社会福祉士を目指す人間健康学部第1期生

●人間健康学部3年次生

山本 夕貴 さん

社会福祉士になって福祉の現場で働きたいと考えている山本夕貴さんは、関西大学人間健康学部の第1期生。高校3年生のとき、関西大学に新学部ができることを知った。「ここ」「からだ」「くらし」を総合的にとらえ、健やかでおおらかな生き方を目指すという教育目的に共感し、「ここに行こう」と決めた。実際に入ってみて、どうだったか――。



第1期生ということは、当然、先輩がいない。

「将来の進路のことも、先輩に話を伺ったりできないのはちょっと残念ですが、そのぶん同級生の結束が固くて、友達とよく話をします。これから始まる実習や社会福祉士の国家試験などに対する不安があっても、みんなで頑張って福祉の世界を引っ張っていかうぜ、みたいな感じで心強い」

先輩はいなくても、山本さんたちの学年は、1、2年次生から見れば先輩。この日も、山本さんを囲んで後輩たちと話が弾んでいた。

「2年次生のとき、児童や障害者、高齢者の福祉施設を見学し、お話を聞かせていただきました。どこの施設へ行っても、職員さんがすごく輝いている。頑張っておられる姿を見て、カッコいいなと思いました。福祉の仕事って、しんどくて大変でも、楽しそうなんです。私も福祉の場で働きたいと改めて思いました」

山本さんは、笑いやユーモアに関する授業が面白かったという。笑いの文明史、ユーモアの思想史、ユーモアコミュニケーション論等々。「福祉は人と接する仕事。コミュニケーションの

仕方やその場の雰囲気づくりを学ぶのにも役立ちます。福祉レクリエーション論は、先生に毎回いろんなレクリエーションを教えてください、みんなでワイワイ言いながら実際にやってみる楽しい授業でした」

山本さんが今、特に力を入れて勉強しているのは、福祉に関する法律や制度。「今のままでは、相談を受けても何も解決してあげられない。知識や技術をもっともっと身につけていかないとだめです。気持ちだけではどうにもならないので」

8月10日から、堺市の福祉事務所で1カ月間の実習が始まった。やがて卒業論文も待っている。生活保護にかかわる自立支援プログラムや就労支援について調べる予定だ。

「生活保護が問題になっていますが、頑張っているけれども職に就けない人たちがたくさんいます。給付するだけではなく、その人たちが自分で生活できるように支援していくことが重要です。貧困の連鎖といわれるように、生活保護を受けている世帯の子どもは教育の機会が少ないことも問題です。

人の力になれる仕事がしたいと思って学んでいくうちに、障害者福祉、児童福祉、高齢者福祉、どの分野も問題が山積みであることが分かりました。何か事件が起こらなければ、児童の虐待も話題に上りません。これはやばいぞ、頑張らないといけないと思います。

福祉について考えることは、普段の暮らしの幸せについて考えることだと教わりました。それは障害者や子どもや高齢者など社会的弱者に限られるのではなく、みんなに関係することじゃないですか。みんなの暮らしが幸せになるように自分の培った知識や技術を使えるって、すごくいい仕事だと思います。私は、みんなが少しでも幸せな生活ができるように力添えしていきたい」



山本 夕貴 ―やまもと ゆき  
 ■1991(平成3)年、大阪府生まれ。大阪府立長野高校卒業。人間健康学部人間健康学科福祉と健康コース3年次生。趣味はロック音楽鑑賞。「法律や制度と現実との矛盾を感じたり、もうちょっと融通が利けばいいのと思うようになって、福祉行政にも興味が出てきました」

## 目標は リオデジャネイロ・パラリンピック

### 障害者スポーツとしてボッチャの普及を目指す

●ボッチャ 選手

高田 信之 さん ―文学部2002年卒業―

障害者スポーツは多様化し、競技人口も増えている。ヨーロッパで考案され、世界に普及しつつあるボッチャは、パラリンピックの正式種目。関西大学卒業後に海の事故で重傷を負った高田信之さんは、リハビリを通じて出会ったボッチャに夢中になり、今では国内トップクラスの選手になった。目標は、2016年のリオデジャネイロだ。

ボッチャは、赤・青6球ずつの柔らかいカラーボールを白い目標球(ジャックボール)に、どれだけ近づけることができるかを競う。投げたり、転がしたりするだけではない。ボールで壁をつかって対戦相手の接近を邪魔したり、優位に立つ相手のボールを狙ってはじき飛ばしたりもする。作戦や相互の駆け引きも要求される。



試しに、カメラマンなど取材陣もボッチャに挑戦してみた。やってみると、思わず熱中してしまうほど面白い。小学校でボッチャの普及活動を行っている高田さんに、ある子どもが「ボッチャが面白くてもっとうまくなりたいから、僕も高田さんみたいにけがをしてもいいなと思いました」と言った。そんな率直な感想どおり、初心者から高度な技を磨いている人まで楽しめる、奥の深い競技だ。

高田さんがボッチャを知るきっかけとなった事故は、関西大学を卒業した翌年の夏に起きた。理学療法士を目指してアルバイトをしていた公営プールのインストラクター仲間と海へ遊びに行き、飛び込んだところが浅瀬だった。

高田さんは子どものころから水泳を習い、関西大学では第2部体育会水泳部に所属。「なまじっか水泳をやっていたから、きれいな角度で飛び込んで、まともに首の骨を折りました」。3日間意識がなく、手術した病院に3カ月、リハビリ病院に1年3カ月入院した。

「僕は地球にけんかを売った、地球の裏側のブラジルあたりでは地震で揺れたはずだ、と言い続けています。実際、落ち込んだのは1日だけでした。頸椎損傷で手足は動かず、ずっと車椅子生活だと言われて、それが自分の中で納得いかなかったのです」



高田 信之 ―たかだ のぶゆき  
 ■1979(昭和54)年、大阪府生まれ。2002年関西大学文学部教育学科心理学専攻卒業。03年7月に、海で浅瀬に飛び込んで頸椎損傷の重傷を負う。「自分が障害者になって、また障害者の方々と接するようになって、違う目線で社会を見るようになりました。障害者にかかわる制度や法律がころころ変わったり、ヘルパーさんの待遇が改善されないことも問題です」

必死にリハビリに取り組んだ結果、左肩がわずかに動く状態だったのが、自分でご飯を食べ、車椅子で移動するなど、できることがどんどん増えていった。

そして、ボッチャとの出会い。リハビリの一環ではあったが、最初は軽い気持ちで、競技というよりもレクリエーションとして、ボールを使って一緒にワイワイやっているのが楽しかった。

ボッチャは重度脳性まひや四肢重度機能障害の人を対象に、BC1~4のクラスに分けられ、個人戦と団体戦がある。高田さんはBC4クラスで、国内トップを狙うまで実力をつけてきた。2009年には、香港で開催された大会に出場した。

「初めて海外で試合をして、そこそこ健闘して負けたのです。それが悔しかった半面、手が届かない相手ではないなと感じ、海外でもやれるんじゃないかと思うようになりました」

ボッチャの魅力はたくさんある。「思ったところに思ったとおり、びたっとボールが行ったときの気持ちよさ。また、標的自体もボールなので、動くたびに状況が変わり、一発大逆転も可能など面白いです」。高田さんは白い目標球に命中させて、それを並んでいる自分のボールに近づけるという妙技も見せてくれた。2016年のリオデジャネイロ・パラリンピックという大目標に自身を近づけるために、熟練の手からますます多彩な技が繰り出されることだろう。